

小 学 校

令和4年度

教育研究員研究報告書

特別の教科 道徳

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究の仮説	2
IV	研究構想図	3
V	研究の内容	4
1	基礎研究	4
2	調査研究	7
3	実践研究	9
	〈指導事例1：第5学年〉	9
	〈指導事例2：第6学年〉	11
	〈指導事例3：第6学年〉	13
VI	研究のまとめ	15

研究主題

自己の生き方についての考えを深める児童の育成 ～道徳的価値の理解を基に、自己を見つめる指導方法の工夫～

I 研究主題設定の理由

1 研究主題について

人工知能（AI）、ビッグデータ、Internet of Things（IoT）、ロボティクス等、高度化した先端技術があらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来しつつある。「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（中央教育審議会 令和3年1月26日）では、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。」と示している。また、新学習指導要領の着実な実施が、「令和の日本型学校教育」の実現につながるものの一つとして示されている。

「小学校学習指導要領」（平成29年告示）では、第1章総則に「道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする」と示している。

また、「東京都教育施策大綱」（東京都 令和3年3月）では、「『未来の東京』に生きる子供の姿」を「自らの個性や能力を伸ばし、様々な困難を乗り越え、人生を切り拓いていくことができる」、「他者への共感や思いやりを持つとともに、自己を確立し、多様な人々が共に生きる社会の実現に寄与する」と描いている。自分の可能性を自分で認め、自己肯定感や自己有用感をもって、人生や社会をより良いものにしていくために、自ら考え、行動する力が求められている。

変化の激しいこれからの社会を、自分のよさや可能性を認識して主体的・創造的に生き抜いていく子供を育成するためには、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする道徳教育と、その要となる道徳科の授業が大きな役割を担っていると言える。

「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」（以下「道徳編」という。）では「自己の生き方についての考えを深める」ことについて以下のように示されている。また、本研究についての協議を進めていく中で、これからの自己の生き方の課題について考え、それを実現していこうとする思いや願いを深める児童を育てたいという強い思いが、部員から挙げられた。

第2章 道徳教育の目標 第2節 道徳科の目標 2 道徳性を養うために行う道徳科の学習

(4) 自己の生き方についての考えを深める（一部抜粋）

児童は、道徳的価値の理解を基に自己を見つめるなどの道徳的価値の自覚を深める過程で、同時に自己の生き方についての考えを深めているが、特にそのことを強く意識させることが重要である。

児童が道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えることを通して形成された道徳的価値観を基盤として、自己の生き方についての考えを深めていくことができるようにすることが大切である。

本研究では、下線部に示されている「自己の生き方についての考えを深めているが、特にそのことを強く意識させること」に着目し、その指導方法を研究していくこととした。以上のことから、研究主題を「自己の生き方についての考えを深める児童の育成」と設定した。

2 研究副主題について

「道徳編」によれば、「児童が道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えることを通して、形成された道徳的価値観を基盤として、自己の生き方についての考えを深めていくことができるようにすることが大切である。」と記載されており、本時の中で、児童が道徳的価値の理解を深める時間を教師が意図的に設定することは、児童が自己を見つめ、自己の生き方についてより深く考えるために重要であると考えた。このことから、副主題を「道徳的価値の理解を基に、自己を見つめる指導方法の工夫」と設定し、研究を進めた。

II 研究の視点

1 自己を見つめる発問構成の工夫

「道徳編」によれば、「自己を見つめる」とは、これまでの自分の経験やそのときの感じ方、考え方と照らし合わせながら、更に考えを深めることである。児童が自己を見つめるためには、一貫して自己を見つめることができる授業を構成することが重要だと考え、「発問構成図」（詳細V 1 (2) 図1参照）を開発した。「発問構成図」を活用して、最初に本時のねらいとする道徳的価値を明らかにするため、中心的な発問を設定した。本時のねらいとする道徳的価値を明らかにした上で、児童が一貫して自己を見つめる時間となるよう、導入と展開の後半の発問を考えた。導入において道徳的価値に関する自分の経験や感じ方、考え方について意識する時間を持ち、教材での学びを挟んで、展開の後半でも同様の発問を行うことで、児童は教材を通した学習での自己の感じ方や考え方の深まりに気づき、自己の生き方について見直すことができると考えた。

本研究では、このような発問構成の授業を行うことにより、児童は自己の生き方についての考えを深めることができると考えた。

2 自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫

言語は、知的活動だけではなく、コミュニケーションや感性、情緒の基盤である。道徳科においても、児童一人一人の感じ方や考え方を表現する機会を充実し、自らの道徳的な成長を実感できるようにすることが大切であると、「道徳編」には示されている。本研究では、自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動として、「話し合いの工夫」と「書く活動の工夫」を行った。「話し合いの工夫」は、「児童一人一人が自己の考えをもつ」、「異なる考えに接することで自己の感じ方や考え方を明確にする」という視点で整理し、効果的な活動を選択できるようにした。「書く活動の工夫」では、自己を見つめる発問構成と連動させ、導入と展開の後半に書く活動を取り入れることで、自己の感じ方や考え方を明確にし、考えの深まりに気づきやすくした。

III 研究の仮説

「自己を見つめる発問構成の工夫」及び「自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫」を行うことで、道徳的価値の理解を基に自己を見つめる過程において、児童は自己の生き方についての考えを深めることができるだろう。

IV 研究構想図

【教育研究員 共通研究テーマ】 「これからの社会を主体的・創造的に生き抜いていく子供の育成」
【研究の背景】 ○「小学校学習指導要領」（平成29年告示）第1章総則において、道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことが目標とされている。 ○『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」（中央教育審議会答申 令和3年1月26日）において、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。 ○「東京都教育施策大綱」（東京都 令和3年3月）において、「未来の東京」に生きる子供たちに求められる資質として、自分の可能性を自分で認め、自己肯定感や自己有用感を持って、どのように人生や社会をより良いものにしていくのか、自ら考える力を不断に伸ばし、発揮できるようにすることが求められている。
【研究主題】 自己の生き方についての考えを深める児童の育成 ～道徳的価値の理解を基に、自己を見つめる指導方法の工夫～
【目指す児童の姿】 これからの自己の生き方の課題について考え、それを実現していこうとする思いや願いを深める児童
【研究の視点】 1 自己を見つめる発問構成の工夫 2 自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫
【研究の仮説】 「自己を見つめる発問構成の工夫」及び「自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫」を行うことで、道徳的価値の理解を基に自己を見つめる過程において、児童は自己の生き方についての考えを深めることができるだろう。
【研究の内容】 (基礎研究) ・自己の生き方についての考えを深めることについて ・自己を見つめる発問構成の工夫について ・自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫について (調査研究) ・教師が道徳科の授業を行う上での課題を、令和3年度道徳教育実施状況調査の結果を基に分析する。 (実践研究) ・研究の視点に基づく指導方法の工夫や改善を取り入れた検証授業を行う。
【研究のまとめ】 研究の視点に照らして児童の学習状況を見取り、指導方法の工夫が効果的であるか分析する。また、検証授業前後に児童の意識調査を行い、自己の生き方についての考えに対する意識の変容を分析する。

V 研究の内容

1 基礎研究

(1) 自己の生き方についての考えを深めることについて

本研究では、「特に自己の生き方についての考えを深めることを強く意識して指導すること」に着目して協議を行い、その指導について表1のようにまとめた。

表1 自己の生き方についての考えを深める指導

【研究の視点1】 自己を見つめる発問構成の工夫	【研究の視点2】 自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫
↓	↓
道徳的価値の理解を自分との関わりで深める	自分自身の体験やそれに伴う感じ方や考え方などを確かに想起する
↓	
自己の生き方についての考えを深める児童 自己の生き方の課題について考え、それを実現していこうとする思いや願いを深める	

児童が自己の生き方についての考えを深めるには、「道徳的価値の理解を自分との関わりで深める」と、「自分自身の体験やそれに伴う感じ方や考え方などを確かに想起する」ことが必要である。本時の自己を見つめさせる場面で、教師が意図的に道徳的価値と自分との関わりを考えさせることで、児童は自己を見つめ直すことができる。その上で、言語活動を意識的に取り入れることで、児童は自己の考えを明確に表出し、自己の生き方について考えを深めることにつながると考えた。そのことを教師が強く意識して指導するための手だてとして、表1にある研究の視点で検証授業を行った。

(2) 自己を見つめる発問構成の工夫について

本研究では、「自己を見つめる」児童の姿を「児童が、主題に関わる自身の経験や、主題に関する感じ方や考え方を確かに想起し、自分自身と照らし合わせながら教材を通して考えを深める姿」と定義した。そして、児童が一貫して自己を見つめることができる授業を構成するために、図1の「発問構成図」を開発した。本研究における検証授業では、「発問構成図」を活用し、検討を行った。活用のポイントは以下のとおりである。(以下①～⑦は、図1発問構成図に対応している。)

- ① 指導観（価値観、児童観、教材観）を明確にし、主題とねらいを設定する。
- ② ねらいに深く関わる中心的な発問を設定する。
- ③ 発問に対する児童の感じ方や考え方（関連する道徳的価値を含む）を予想する。
- ④ 本時のねらいとする道徳的価値により深く迫るための、発問を工夫する。
- ⑤ 「自己の生き方についての考えを深める」ことを意識させられるような、展開の後半での「自己を見つめる発問」を考える。
- ⑥ 導入から終末まで一貫してより深く自己を見つめられるように、導入での「自己を見つめる発問」を考える。
- ⑦ 自己の生き方についての考えを深めることを意識させる発問を考える。

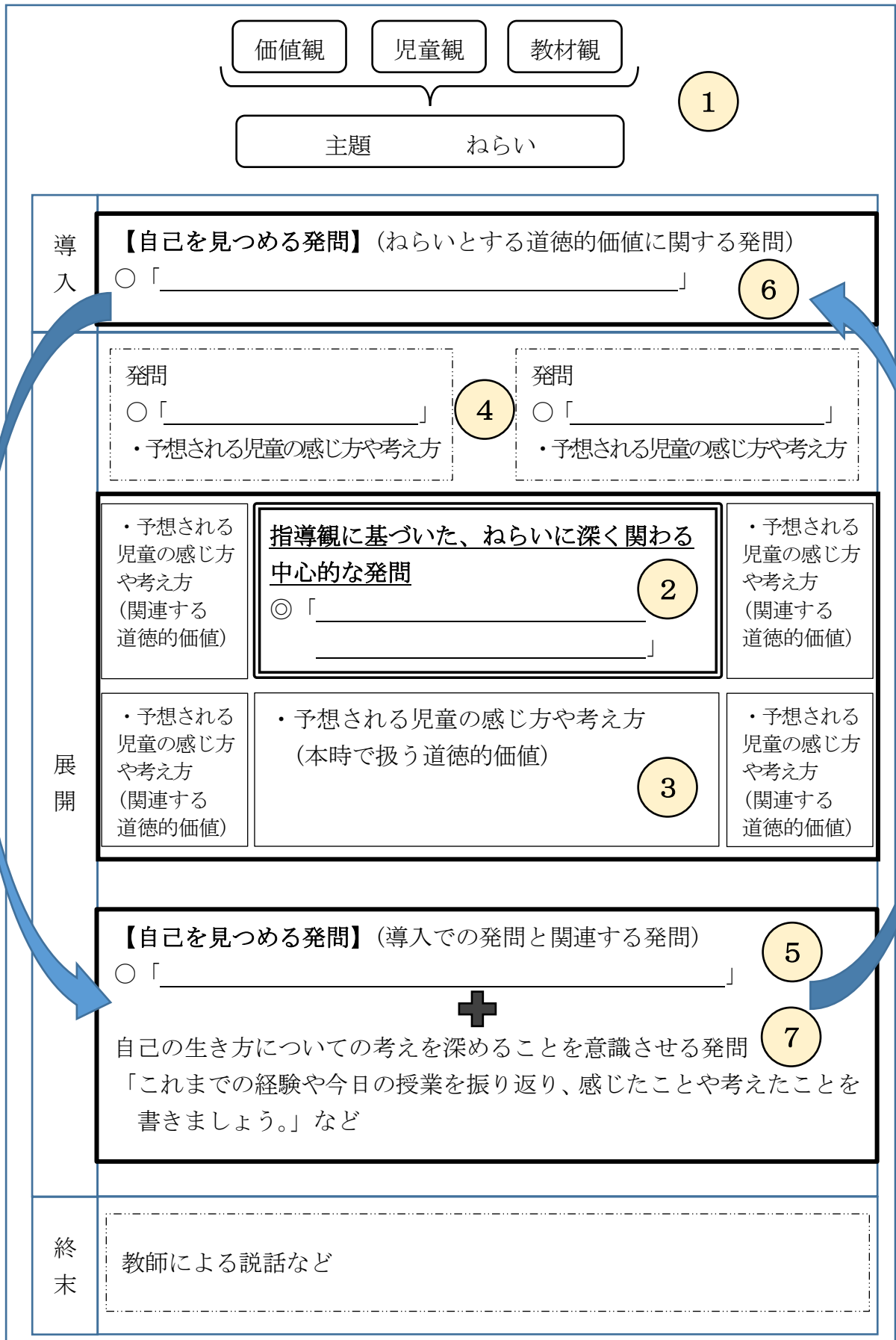


図1 発問構成図

(3) 自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫について

「道徳編」第4章「指導計画の作成と内容の取扱い」の第3節「指導の配慮事項」の4「多様な考え方を生かすための言語活動」では、「言語は、知的活動だけでなく、コミュニケーションや感性、情緒の基盤である。道徳科においても、言葉を生かした教育についての充実が図られなければならない。」と示されている。自己の感じ方や考え方を明確にし、考えの深まりに気づきやすくするための言語活動を取り入れるためには、教師が明確な意図をもって言語活動を行うことが重要である。本研究では、授業の中における言語活動を「話し合いの工夫」と「書く活動の工夫」の2点に整理し、意図的に授業の中で活用した。

「話し合いの工夫」では、話し合いのねらいを更に「児童一人一人が自分の考えをもつ」、「異なる感じ方や考え方に接することで自分の感じ方や考え方を明確にする」の2点に分類した。話し合いのねらいに対応した指導方法を表2のように整理することで、教師が本時のねらいや指導観に応じて意図的に指導方法を選択できるようにした。

表2 話し合いのねらいに対応した指導方法の整理

ねらい	児童一人一人が自分の考えをもつ	異なる感じ方や考え方に接することで自分の感じ方や考え方を明確にする
指導方法	<ul style="list-style-type: none"> ・教師や友達からの問い掛け ・多様な方法による考えの表出 ・ペアでの伝え合い ・役割演技や動作化 	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数での話し合い ・学級全体での話し合い ・教師の意図的な指名による話し合い ・ハンドサインや相互指名による話し合い

「書く活動の工夫」では、書く活動のねらいを「これまでの自分の経験やそれに伴う感じ方、考え方を想起する」、「道徳的価値の理解を基に改めて自己を見つめ、自身の感じ方や考え方の深まりを実感する」とした。「自己を見つめる発問構成」と連動させ、導入と展開の後半で書く活動を取り入れ、図2のように記述が比較できるようにワークシートを工夫した。

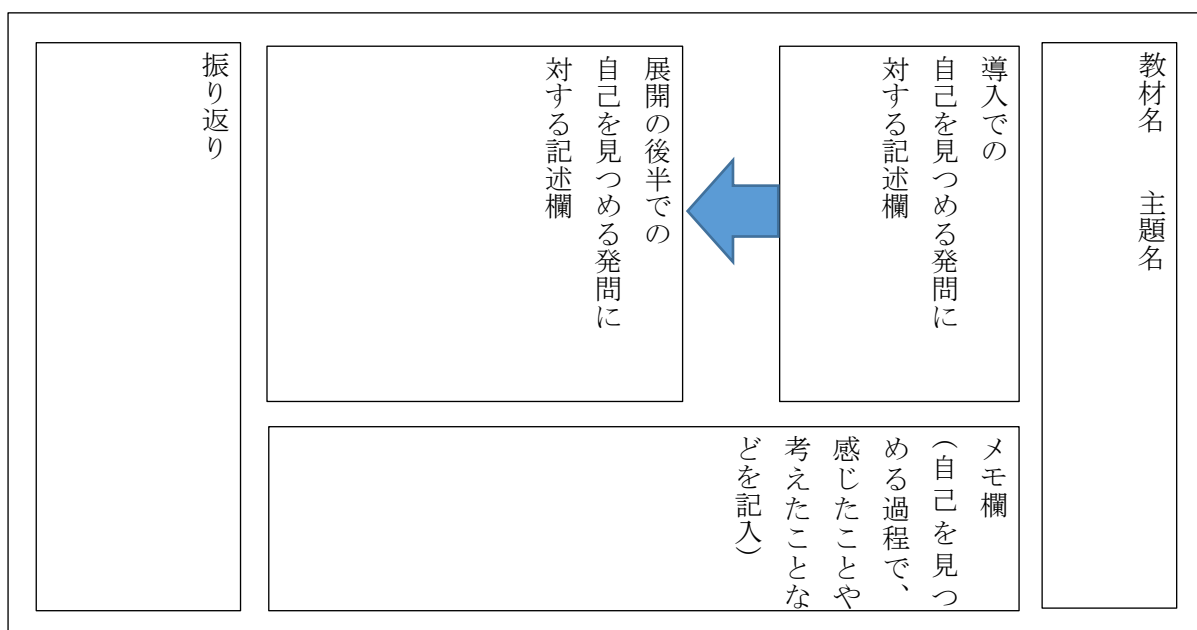


図2 ワークシート例

2 調査研究

(1) 目的

令和3年度道徳教育実施状況調査における道徳科の授業を実施する上での課題及び道徳科の評価を行う上での課題についての分析を通して、研究主題に迫る指導の工夫の視点を明らかにする。

(2) 内容

令和3年度道徳教育実施状況調査の全国公立小学校及び全国公立義務教育学校（前期課程）の集計結果から、実践研究に生かして改善を図るための方法を考察する。

(3) 対象

【全国公立小学校】1,187校

【全国公立義務教育学校（前期課程）】10校

(4) 調査結果及び考察

表3 道徳科の授業を実施する上での課題

選択肢（複数解答可）	小学校数	回答割合
1. 話し合いや議論などを通じて、考えを深めるための指導	725	63.8%
2. 物事を多面的・多角的に考えるための指導	635	55.8%
3. 道徳的価値の理解を自分との関わりで深めるための指導	647	56.9%
4. 問題解決的な学習を取り入れた指導	265	23.3%
5. 道徳的行動に関する体験的な学習を取り入れた指導	306	26.9%
6. 特別活動等の多様な実践活動を生かした指導	157	13.8%
7. 情報モラルや現代的な課題に関する指導	465	40.9%
8. 各教科等と関連をもたせた指導	230	20.2%
9. 多様な補助教材の選定や活用	217	19.1%
10. 道徳科の特質を踏まえたICTの効果的な活用	536	47.1%

令和3年度道徳教育実施状況調査（文部科学省）より抜粋

○ 考察

小学校において道徳科の授業を実施する上で、「話し合いや議論などを通じて、考えを深めるための指導」に課題を感じている学校が最も多く、63.8%である。次いで「道徳的価値の理解を自分との関わりで深めるための指導」に課題を感じている学校が56.9%である。このことから、話し合いや議論などを通じて、児童が考えを深めるための指導方法の工夫や共有が求められていることや、本時の中で道徳的価値の理解を自分との関わりで深めるための具体的な手だてが必要とされていることが読み取れる。これらの課題の解決については、多くの学校が求めている内容であり、本研究における「児童が自己の生き方についての考えを深める」ことにつながることを考えた。そこで、本研究では上記2点の課題解決のため、指導方法を工夫して研究主題に迫ることが重要なテーマとなると考えた。

表4 道徳科の評価を行う上での課題

選択肢（複数解答可）	小学校数	回答割合
1. 児童生徒の学習状況及び道徳性に係る成長の様子の把握	628	55.2%
2. 年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中での評価	469	41.2%
3. 評価の妥当性や信頼性の担保	767	67.5%
4. 指導要録等への具体的な記述方法	293	25.8%
5. 指導と評価の一体化	523	46.0%
6. その他	12	1.1%
7. 特になし	20	1.8%

令和3年度道徳教育実施状況調査（文部科学省）より抜粋

○ 考察

小学校で道徳科の評価を行う上で課題と考えられているものは「評価の妥当性や信頼性の担保」が最も多く、67.5%である。次いで「児童生徒の学習状況及び道徳性に係る成長の様子の把握」が55.2%であり、共に半数を超える学校が課題として捉えていることが分かった。このことから、児童の学習状況及び道徳性に係る成長の様子を把握し、妥当性や信頼性を担保した評価をするための有効な手だてが求められていることが分かった。本研究の視点の一つである言語活動の充実を研究することは、有効な手だてにつながるものであると考えられる。

(5) 考察のまとめ・実践研究に生かす視点

表3の結果より、話し合いや議論を通じて考えを深めること、道徳的価値を自分との関わりで深めるための指導方法を工夫することが求められていることが分かった。そのためには、児童がねらいとする道徳的価値を自分事として捉え、教材に自我関与し切実感をもって考えを深めることが必要である。実践研究では主題名を黒板に提示し、児童に考えさせることを可視化するようにした。また、発問構成図を用いた授業構成により、児童が道徳的価値の理解を深めた上で自己を見つめられるように考えた。

表4の結果より、児童の学習状況及び道徳性に係る成長を把握し、妥当性や信頼性を担保した評価が求められることが分かった。評価の際には児童の学習履歴や変容を事後に確認できる材料を確保することが有効である。これは評価の妥当性や信頼性を担保する意味でも重要なものと考えられる。そのため、書く活動を中心とした言語活動の充実を図り、学習状況及び道徳性に係る児童の成長を把握し記録していく。また、充実した言語活動を意図的に設定した上で話し合いや議論を行うことは、多様な意見に触れて考えを広げたり、物事を多面的・多角的に考え自己の生き方について考えを深めたりする手だてとなる。研究主題「自己の生き方についての考えを深める児童の育成」に迫る有効な手段になり得ると考え、実践研究に取り入れた。

3 実践研究<指導事例1：第5学年>

- (1) 主題名 「自由であるために」 A 善悪の判断、自律、自由と責任
- (2) ねらい 自由の意味を考え、自律的で責任ある行動をしようとする態度を育てる。
- (3) 教材名 「うばわれた自由」
- (4) 主題設定の理由（指導観）

ア 価値観

価値観が多様化し、情報があふれる近年の社会においては、児童は他者の影響を受けやすい状況にあり、結果として自己を見失ってしまうことがある。また、自分の価値観だけを主張しても自分勝手やわがままになってしまい、深く考えずに行動したことが様々な問題につながってしまうこともある。自由には、自分で自律的に判断し、行動したことによる自己責任が伴う。自分の自由な意思によっておおらかに生きながらも、内から自覚された責任感の支えによって、自ら信じることに従って、自律的に判断し、実行していこうとする態度を身に付けさせたい。

イ 教材観

森でガリユーとジェラル王子が話す場面において、自由について主張するジェラル王子とその考えを否定するガリユー、相反するそれぞれの考えを表出させることで、自分との関わりで道徳的価値についての理解を深める。中心的な発問では、即位後、ろうやに入れられたジェラル王の心情の変化から、あるべき本当の自由について自分との関わりで考えさせ、同時に、自由であることについて「節度、節制」、「規則の尊重」などの面からも考えさせる。

(5) 研究の視点

ア 自己を見つめる発問構成の工夫

展開の後半における自己を見つめる発問では、道徳的価値の理解を基にして「自由であるために大切にしたいこと」を考えさせる。ここでの学びを更に深めるために、導入で「自由でよかった経験」、「自由であるために大切なこと」について事前アンケートの結果を共有し、児童一人一人に考えをもたせておく。導入と展開の後半で同様の発問を投げ掛けることにより、授業を通して自分の感じ方や考え方の深まりや広がり意識できるようにした。

イ 自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫

ワークシートは、導入（事前アンケート）と展開の後半での発問の記述欄が一体となったものを活用し、事前アンケートを生かして考えられるようにする。また、ワークシートには自由記述欄を設け、交流の時間に他者の考えを記述できるようにした。話合いでは、自分勝手に振る舞うときの考えや、自分勝手な振る舞いに対する感じ方・考え方を自分との関わりで考えさせるために、役割演技を取り入れた話合いを設定した。これらの工夫により、児童の自己理解を促すとともにこれから伸ばしたい自己を深く見つめられるようにした。

(6) 学習指導過程

	学習活動（○発問 ◎中心的な発問）	◇指導の工夫 ☆評価
導入	1 主題について自分の考えをもつ。 【自己を見つめる発問】 ○「自由であるために大切なこと」は何か。	◇ワークシートに事前に書かせたアンケート結果を確認する。

展開	<p>2 教師の範読を聞き、教材を基に考える。</p> <p>○狩りの場面で、ジェラル王子とガリューはそれぞれどのようなことを考えていたか。</p> <p>◎「<u>本当の自由を大切に生きてまいりましょ</u> <u>う</u>」というガリューの言葉を聞いて、ジェラル王はどのようなことを考えたか。</p> <p>3 自己の生き方について考えを深める。</p> <p>【自己を見つめる発問】</p> <p>○「自由であるために大切にしたいこと」は何か。</p>	<p>◇自分勝手に振る舞うときの考えや、自分勝手な振る舞いに対する感じ方・考え方を自分との関わりで考えさせるために、役割演技を行う。</p> <p>◇多様な考えに触れ、自分の感じ方や考え方と比較できるように、意図的指名による発言を全体で聞き合う。</p> <p>◇ワークシートに、事前アンケートで書いた考えと比較しながら自分の考えを書かせる。</p> <p>☆道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、「自由に生きるために大切なこと」について考えを深めているか。(記述)</p>
終末	<p>4 教師の説話を聞く。</p>	

(7) 成果と課題 (○成果 ●課題)

ア 自己を見つめる発問構成の工夫

- 事前にアンケートを行った「自由であるために大切なこと」の結果を共有したことで、主題を学級全体で共有し、児童一人一人が本時の学習に課題意識をもって臨むことができた。
- 展開の後半では導入と同様の自己を見つめる発問をし、アンケート結果を再度確認してから考えさせた。その結果、児童自身が道徳的価値の理解を基に改めて自己を見つめ、自身の考えの深まりや違いを実感したり、自己の生き方について考えを深めたりすることができた。
- 第一発問において対立的な二人の考えや立場について、児童の発言を教師が意図的に問い返すことができれば、児童はより一層多様な感じ方・考え方に触れることができ、深く自己を見つめられたのではないかと考える。

イ 自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫

- 自分との関わりで考えられるようにするために、役割演技やペアでの話し合い、多様な意見に触れるための全体での聞き合いの時間など、多様な言語活動を学習指導過程の中に意図的に入れることで学習が活性化し、児童一人一人の感じ方や考え方を明確にする一助となった。
- 開発したワークシートを活用したことで、導入時の考えと比較しながら具体的に自分の生き方についての考えを記載している児童がおよそ 57%いた。
- それぞれの話し合い活動や書く活動の特性や効果を指導者が明確にし、どのような意図でその活動を行うのかを児童にも示すことができれば、本時での言語活動がより一層高まり、児童が自己の生き方についての考えを深めることができたと考えられる。

<指導事例2：第6学年>

- (1) 主題名 「自分の心に誠実に生きる」 A 正直、誠実
- (2) ねらい 自分に対して誠実に生きていこうとする実践意欲を育てる。
- (3) 教材名 「手品師」
- (4) 主題設定の理由（指導観）

ア 価値観

自分らしさを発揮しながら生活するためには、自分の気持ちに偽りのないようにすることが求められる。自分自身と向き合いながらよりよい方向に考えをめぐらし、自分の心に後悔せず、清々しく真心を込めて生きようとする姿勢が誠実さであると考え。本時では、児童一人一人が誠実な生き方について話し合うことにより「誠実さ」についての考えを一層深めさせ、自分自身が導き出した「誠実さ」を大切に生きていこうとする実践意欲を育てたい。

イ 教材観

第一発問において、手品師が男の子との約束を守る方を選んだ理由を考えることにより、手品師が自分の選んだ生き方を後悔せず、自分自身に誠実でしようとしたことに気付かせたい。中心的な発問では、第一発問での気付きを基に、翌日、手品師は男の子の前でどんなことを考えながら「素晴らしい手品を次々と演じた」のかを問う。手品師が選んだ誠実な生き方に触れることで、児童一人一人が自己を見つめ、誠実に生きていこうとする実践意欲を育てたい。

(5) 研究の視点

ア 自己を見つめる発問構成の工夫

導入で「誠実」とはどのような意味なのか共有した上で、「誠実に生きるよさ」について発問し、自分の経験から想起させた課題意識をもたせる。教材を通して、手品師の生き方から誠実に生きることのよさを考えさせる。展開の後半で改めて「誠実に生きるよさ」についての考えを問う。話し合いを通して異なる考えに触れながら自己理解を深め、これからの生き方の課題や実現したい思いや願いをもたせる。

イ 自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫

中心的な発問や展開の後半の話し合いでは、自分の考えを明確にもつとともに、他者の考えに触れることで自分の感じ方や考え方を整理したり、再考したりできるようにする。そのために、「自分の考えをもつ、ペアに伝える、小グループで考えを交流する、全体で考えを共有する」場面を取り入れる。話し合いにより異なる感じ方や考え方に触れ、比べることで明確になった自分の感じ方や考え方をワークシートに書かせる。ワークシートは導入時に記入した考えと比較できる構成にする。

(6) 学習指導過程

	学習活動（○発問 ◎中心的な発問）	◇指導の工夫 ☆評価
導入	1 主題について自分の考えをもつ。 【自己を見つめる発問】 ○「誠実に生きるよさ」とは、どのようなことか。	◇ワークシートに、自分の考えを書かせる。

展 開	<p>2 教師の範読を聞き、教材を基に考える。</p> <p>○手品師が友人の誘いをきっぱりと断ったのは、どのような思いからか。</p> <p><u>◎手品師はどのようなことを考えながら、素晴らしい手品を次々と演じたのか。</u></p> <p>3 自己の生き方について考えを深める。</p> <p>【自己を見つめる発問】</p> <p>○「誠実に生きるよさ」とは、どのようなことか。</p>	<p>◇自分の考えをもつ時間を取る。</p> <p>◇話すことで自分の考えを整理するためにペアで伝え合う。</p> <p>◇他者の考えに触れられるように、小グループで意見を交流させる。</p> <p>◇多様な考えに触れ、自分の感じ方や考え方と比較できるように、意図的指名による発言を全体で聞き合う。</p> <p>◇ワークシートに、導入時の考えと比較しながら自分の考えを書かせる。</p> <p>☆道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、「誠実に生きるよさ」について考えを深めているか。(記述)</p>
終 末	<p>4 教師の説話を聞く。</p>	

(7) 成果と課題 (○成果 ●課題)

ア 自己を見つめる発問構成の工夫

- 導入で「誠実」とはどのような意味なのかを提示したり、事前アンケートで「誠実に生きるよさとはどのようなことだと思うか。」と聞いたりすることで、本時のねらいに対する課題意識をもたせることができた。
- 導入と展開の後半で同じ発問をすることで、「誠実に生きるよさ」について児童が自分の考えの変容を自覚したり、自己の生き方についての考えを深めたりすることができた。
- 中心的な発問では、児童の思考を深めるための意図的な指名が十分にできていなかったため、児童がねらいとする道徳的価値の理解を深めるための時間が予定よりかかってしまった。

イ 自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫

- 自分の考えを全体で共有することにより、自分の考えを明確にもつことができた。
- 開発したワークシートの記述から、ねらいとする道徳的価値についての考えを自分の生き方と照らし合わせて考えていると読み取れる児童がおよそ61%程度おり、半数以上の児童は、自分のこととして道徳的価値の理解を深めたと考える。
- 話し合う言語活動の時間において、目的意識をもったグループ対話や、ペア学習を効果的に取り入れることで、より一層自己の生き方について考えを深めることを意識できると考える。

<指導事例3：第6学年>

- (1) 主題名 「法やきまりを守るとは」 C 規則の尊重
- (2) ねらい 法やきまりの意義について理解し、すすんで守ろうとする心情を育てる。
- (3) 教材名 「ここを走れば」
- (4) 主題設定の理由（指導観）

ア 価値観

児童が成長することは、同時に所属する集団や社会を構成する一員として様々な規範を身に付けていくことでもある。誰もが安心して、安全な生活を送るためには、一人一人が互いの権利を尊重し理解し合うことが大切である。しかし、個人の権利ばかりを主張しすぎると社会の安全、安心な生活を脅かすことにもつながる。本時では、法やきまりのもつ意義についての理解を深め、周りの人や自分のためにすすんで守ろうとする心情を育てていきたい。

イ 教材観

祖父の危篤という状況であっても、路側帯を走らなかった父の姿から、法やきまりには意義があることや、どんな時でもその意義を理解し守ることの重要性に気付かせたい。中心的な発問では、「路側帯を走らなかった父はどんな思いからですか。」と父の気持ちについて問う。どんな状況であっても、法やきまりの意義を理解し守り通した父の心情を自分との関わりで考えさせることで、道徳的価値の理解を深める。

(5) 研究の視点

ア 自己を見つめる発問構成の工夫

導入では、事前アンケートの結果から自分の経験を想起させた上で、「きまりを守ることの大切さとは何か。」と自己を見つめる発問を行うことで、児童一人一人に課題意識をもたせる。更に展開の後半でも同じ発問を再度投げ掛け、法やきまりに対する自己の生き方についての考えを深めさせる。

イ 自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫

ワークシートは、導入時における自分の考えと見比べながら、展開の後半での自己の生き方についての捉え方や考え方についての記述ができるようにする。また、意見交流を行う際に友達の発言から感じたことを書き込めるような記述欄も設ける。話し合いでは、自分の感じ方や考え方を明確にするためにペアや全体で意見交換をする。友達の多様な感じ方や考え方に触れ、自分の考えと比べることで、自己の生き方についての考えを深められるようにする。

(6) 学習指導過程

	学習活動（○発問 ◎中心的な発問）	◇指導の工夫 ☆評価
導入	1 主題について自分の考えをもつ。 【自己を見つめる発問】 ○「きまりを守ること」はどうして大切なのか。	◇事前アンケートの結果を紹介し、自己の経験を想起させた上で、ワークシートに自分の考えを書かせる。

展 開	<p>2 教師の範読を聞き、教材を基に考える。</p> <p>○路側帯を走る車を見て、ぼくはどのようなことを思ったか。</p> <p>◎「あんなことはできない。」と言ったお父さんはどのような思いか。</p> <p>3 自己の生き方について考えを深める。</p> <p>【自己を見つめる発問】</p> <p>○「きまりを守ること」はどうして大切なのか。</p>	<p>◇自分の考えをもつ時間を取る。</p> <p>◇話すことで自分の考えを整理するためにペアで伝え合う。</p> <p>◇多様な考えに触れ、自分の感じ方や考え方と比較できるように、意図的指名による発言を全体で聞き合う。</p> <p>◇ワークシートに、導入時の考えと比較しながら自分の考えを書かせる。</p> <p>☆道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、「きまりを守ることの大切さ」について考えを深めているか。(記述)</p>
終 末	<p>4 教師の説話を聞く。</p>	

(7) 成果と課題 (○成果 ●課題)

ア 自己を見つめる発問構成の工夫

- 導入において事前アンケート結果を提示した。そのことにより、児童一人一人が主題を自分の経験と照らし合わせて考えることができ、課題意識をもって授業に臨むことができた。
- 展開の後半で再度「きまりの大切さ」についての発問を行った。児童は「きまりを守る意義」や「きまりを守る目的」、「守るための行動」について、更に考えを深めていた。
- 道徳的価値の理解をより深めるために、教師の問い返しが必要であった。「どうしてそう思うのか。」と問うことで、きまりを守ることの難しさや大切さをより実感できたと考える。

イ 自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫

- ペアや全体で意見を交流する時間を設けたことで、多様な感じ方や考え方に触れ、ねらいとする道徳的価値についての理解を深めることができた。
- 導入時における自分の考えと見比べながら記述できるワークシートを活用したことで、60%の児童の記述から、道徳的価値の理解を自分との関わりで考えようとする姿がうかがえた。
- 展開の後半での自己を見つめる発問に対する記述では、37%の児童が自己の生き方についての考えを深めていた。また、授業後に書かせた振り返りでは、「これからは」「大切なことは」など、自己の生き方についての考えを深めていると評価できる記述が60%あった。このことから、展開の後半での自己を見つめる発問に、これまでの経験や授業を振り返って考えることを促す文言を付け加えることで、より一層自己の生き方についての考えを深めることを意識させることができると考える。

VI 研究のまとめ

1 成果と課題

本研究では、研究主題「自己の生き方についての考えを深める児童の育成～道徳的価値の理解を基に、自己を見つめる指導方法の工夫～」を目指し、2つの研究の視点を設定して検証を進めた。成果と課題は、検証授業後に行った授業の分析と児童のワークシートで考察することとした。

(1) 成果

研究の視点1「自己を見つめる発問構成の工夫」において、各検証授業のワークシートを分析した結果、平均96%の児童が自己を見つめていると読み取れる内容を記述していた。また、そのうちの6割近くは、具体的に自己の生き方について考えている記述がみられた。このことから、自己を見つめる発問構成の工夫は、児童が自己の生き方についての考えを深める上で一定の効果があると考察できる。以下に、自己の生き方についての考えを深めた児童の記述を一部紹介する。下線部は、児童が自己の生き方についての考えを深めたと判断した根拠となる記述である。

<指導事例1：第5学年「うばわれた自由」 児童のワークシート記述から>

【導入】 「自由であるために大切なこと」は何か。	【展開の後半】 「自由であるために大切にしたいこと」は何か。
自由な時間をつくるために他のことをし っかりやること。	自己中心的に行動するのではなく、自分のす ることが本当にしてもよいことなのか考え、 <u>責任をも っていきたい。</u>
やるべきことはやること。	わがままな心はなくならないけれど、 <u>しっかり自 分で考えて気持ちを抑えていきたい。</u>

<指導事例2：第6学年「手品師」 児童のワークシート記述から>

【導入】 「誠実に生きるよさ」とは、どのようなこ とか。	【展開の後半】 「誠実に生きるよさ」とは、どのようなことか。
真面目にやると結果が出ること。	人の喜ぶ顔が見られる嬉しさや、 <u>自分のやったこ とに誇りをもつことができることが、誠実に生き ることのよいところだと考えた。</u>
誰に対しても真心をもっていることはよ いことだと思う。でもそれが全てではな いし、場面によってはあまりよくない場 合がある。誠実が全てということではな い。	私が人に偽りなく接していたら、相手が喜んでく れて、嬉しかった。 <u>誠実は誰かが認めてくれなく ても、自分を誇るために、たった一人でも誰かを 笑顔にするために大切なのだと思う。誠実に生き るよさとはそのようなことだと思う。</u>

<指導事例3：第6学年「ここを走れば」 児童のワークシート記述から>

【導入】 「きまりを守ること」は、どうして大切な のか。	【展開の後半】 「きまりを守ること」は、どうして大切なのか。
分からない。	<u>きまりを守らないことがある。「まあいいか」と 思っていたけれど、これではよくないことが分か った。きまりは守らないといけない。</u>
守ればいいことがある。守らなければい いことがない。自分がいいことをすれば、 誰かが、真似してくれる。	<u>きまりを守らないことで、迷惑をかけていたこと が分かった。</u> きまりを守らないと、周りを巻き込 んでしまうから、 <u>きちんと守っていく。</u>

研究の視点2「自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫」では、「話合いの工夫」において、教師が言語活動のねらいを明確にして意図的な話合いを取り入れたことで、学習が活性化することにつながった。また、児童と話合いのねらいが共有されたことで、多くの児童が主体的に話合いに参加し、友達の考えと比較しながら自己を見つめていく様子が見られた。「書く活動の工夫」においては、ワークシートの形式を工夫したことで、多くの児童が導入で記述した感じ方や考え方と比較しながら、展開の後半で自己を見つめたり、自己の生き方についての考えを深めたりする様子が見られた。研究の視点1の成果にあるように、平均96%の児童が自己を見つめていると評価できたことから、「自己を見つめる発問構成」と連動したワークシートは一定の効果があるとともに、児童の学習状況を把握する手だてとしても有効であると考察できる。

(2) 課題

研究の視点1「自己を見つめる発問構成の工夫」においては、ワークシートの分析から考察すると、自己の生き方についての考えにまで至っていない児童が一定数いたため、教師は、より強く意識して児童に自己を見つめるよう促す工夫が必要であると考え。例えば、展開の後半での発問に「これまでの経験や今日の授業を振り返り、感じたことや考えたことを書きましょう。」と、一言を付け加えるだけでも、児童はこれまで感じたことや考えたことを意識して考えたり、ワークシートに記述したりすることができる。また、「自己を見つめる発問構成」を生かすためには、道徳的価値の理解を深める中心的な発問や前後の発問をより一層吟味すること、児童の発言に教師が意図的に問い返すことで、話合いを深めることも課題である。

研究の視点2「自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫」においては、教師が言語活動を取り入れる意図やねらいを明確にすることが大変重要であることが分かった。そのためには、指導観やねらいとは他に、深い児童理解が必要であると考え。教師が学級の児童の様子を普段からよく観察し、例えば異なる考えをもつと思われる児童同士での話合いの場を設定したり、座席配置を工夫したりするなど、その時々児童の状態に応じて指導方法を選択することができれば、児童が更に自己の生き方について考える場を設定することができる。

教師が指導観を明確にした上で発問構成を考えることは、児童の道徳的価値の理解を深めさせるとともに、自己を見つめさせるために重要である。また、その際に確かな児童理解に基づいて、意図的に言語活動を選択することで、児童に多様な感じ方や考え方に触れさせることができる。このような学習を着実に積み重ねていくことは、児童に自己の生き方について考えさせる機会を多く与えることにつながると考える。

なお、本研究は研究員の担当学年により、高学年のみの検証となった。今後は低・中学年でも「自己の生き方についての考えを深める児童の育成」を目指し、研究を進めていく必要がある。

2 まとめ

本研究により、道徳的価値の理解を基に自己を見つめる過程において、「自己を見つめる発問構成の工夫」及び「自己の感じ方や考え方を明確にするための言語活動の工夫」を行うことは、児童が自己の生き方についての考えを深める上で一定の効果があることが分かった。変化の激しいこれからの社会を生き抜いていく児童には、自分のよさや可能性を認識し、人生や社会をより良いものにしていくために、自ら考え、行動する力が求められている。本研究がその育成の一助となるように、今後それぞれの地区において、本研究の成果を還元していく所存である。

令和4年度 教育研究員名簿

小学校・特別の教科 道徳

学 校 名	職 名	氏 名
墨 田 区 立 二 葉 小 学 校	主 任 教 諭	鈴 木 貴 大
大 田 区 立 田 園 調 布 小 学 校	主 任 教 諭	谷 祐 伊
渋 谷 区 立 中 幡 小 学 校	主 任 教 諭	岩 瀬 知 美
足 立 区 立 梅 島 小 学 校	主 任 教 諭	土 谷 英 純
八 王 子 市 立 元 八 王 子 小 学 校	主 幹 教 諭	◎野 手 幹 博
青 梅 市 立 新 町 小 学 校	主 任 教 諭	大 貫 敦 子
青 梅 市 立 若 草 小 学 校	主 任 教 諭	○遠 藤 育 真
西 東 京 市 立 向 台 小 学 校	主 任 教 諭	真 坂 祐 子

◎世話人 ○副世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部指導企画課
指導主事 春原 裕太

令和4年度
教育研究員研究報告書
小学校・特別の教科 道徳

令和5年3月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849